

## 地元になくってはならない学校

### 1. 教育を考える一言

「まっちゃん、頼むな。」

### 2. 背景

私は岐阜県の最北端にある、生徒数 200 人にも満たない小さな全日制高校に勤めています。その高校は小高い丘の上にあり、町の周囲は山に囲まれ、隣町とは 2 つの峠道で結ばれています。周辺の地域から通学する場合、通学手段はバス以外なく、通学費は年間 20 万円を超える場合もあります。ですから、この高校に通う生徒の多くが地元中学の出身です。

しかし、町の子供人口は減少を続け、いつしか「町から高校が無くなる」、「隣の高校と合併する」という根も葉もない噂まで聞かれるようになりました。

この高校のある町は私の地元でもあり、ある時、小さな子供を持つ同級生から「まっちゃん、頼むな。」このような言葉を言われました。私は「入学したら面倒見てくれ」という意味でしかとらえることができなかつたのですが、話を聞くうちに「地元に残してくれ」ということだとわかり、自分の力ではどうにもならない…と思いつつも「無くならんさ」と答えるだけでした。

### 3. 考察

仮に隣の高校へ通うとした場合、起床時間や通学費などによる生徒や保護者の負担は大きく、地元の方々にとってなくてはならない存在の高校ですが、生徒数は年々減少しています。この地区の人口も減少傾向で、この学校の生徒数が劇的に増加することはまず予想できません。しかし、このような学校は日本全国にいくつもあるはずです。平成 23 年度「学校基本調査」によると、公立の全日制高校（本校）は、3,486 校で、全校生徒数が 200 人未満の高校は 275 校（7.9%）存在します。

はたして大規模校と小規模校で経験できること・受けられるサービスは同質なのでしょうか。学校行事や部活動といった面でかなり制限があると考えます。私の勤務校では、バスケットボール部やバレーボール部、サッカー部といった集団競技の部活動は、たとえその競技を続けたくても 1 チームを編成することができない状態です。日本各地の過疎地域・へき地の高校生はその点で不利な面があるのではないかと。学校統廃合により地元の高校がなくなった場合、かなりの生徒の保護者にも負担を強いられるのではないかと。住んでいる地域が、教育面の差になってよいのか。そんな疑問を投げかける一言でした。

#### 参考資料

「政府調査の総合窓口 e-Stat」ウェブサイト 平成 23 年度「学校基本調査」より「高等学校・生徒数別課程数」（74）

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001037154&cycode=0>（2012 年 6 月 4 日アクセス確認）